

Title	シュビイッカン カンカクト イッパン テキ シンライ イ ガ コイビト ト ノ カットウ ジョウキョウ ニ オケル カンケイ ガイブ ヘ ノ サポート キキョウ ニ オヨボス エイキョウ
Author(s)	アサノ, リョウスケ
Citation	対人社会心理学研究. 10 p197-p.204
Issue Date	2010
oaire:version	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/11782
DOI	
rights	
Note	

Osaka University Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

Osaka University

首尾一貫感覚と一般的信頼が恋人との葛藤状況における 関係外部へのサポート希求に及ぼす影響^{1) 2)}

浅野良輔(名古屋大学大学院教育発達科学研究科)

吉田俊和(名古屋大学大学院教育発達科学研究科)

恋愛関係における排他的なネットワークは、外部からの効果的な資源取得を抑制し、葛藤時の適切な対処行動を阻害してしまう。本研究では、恋人との葛藤状況において、首尾一貫感覚と一般的信頼が認知的評価を介して関係外部(最も親しい同性友人)へのサポート希求を促進するかについて検討した。質問紙調査を行い、恋人のいる大学生 130 名(男性 49 名、女性 81 名)を分析対象とした。階層的重回帰分析の結果、対象者の性別や恋人との交際期間、最も親しい同性友人に対する個別的信頼を統制した上でも、首尾一貫感覚は関係外部へのサポート希求を抑制し、一般的信頼は関係外部へのサポート希求を促進することが示唆された。しかし、構造方程式モデリングによる分析の結果、首尾一貫感覚と一般的信頼が関係外部へのサポート希求に及ぼす影響は、認知的評価に媒介されないことが示唆された。関係外部へのサポート希求とその規定因との関連について議論された。

キーワード: 恋愛関係、排他性、サポート希求、首尾一貫感覚、一般的信頼

問題

恋愛関係において、人はパートナーとの排他的なネットワークを形成するものであるが、それによって関係外部の他者にサポートを求めることができなくなり、効果的な資源を取得できず、適切な葛藤対処行動をとれなくなってしまう。本研究の目的は、恋人との葛藤状況において、首尾一貫感覚と一般的信頼が関係外部へのサポート希求を促すかどうかを検討することである。

恋愛関係は、その排他性の高さゆえ、パートナーとの関係とそれ以外の第三者との関係の境界がきわめて明確になりやすい。当事者たちやそれ以外の他者は、キスをしたり腕を組んだりするといった、恋人との間でのみ許容される儀礼的行為に基づき、その関係の排他性の高さを判断する。このような排他性の高さは、パートナー間での効率的な愛情の伝達や情緒的サポートの授受を可能とし、安定した関係の構築に寄与する(増田, 1994)。したがって、パートナーとの排他的なネットワークは個人の受容感や安心感の源として不可欠といえる(Baumeister & Leary, 1995; Feeney, 2004; Feeney & Thrush, 2010)。

しかし、こうした排他的なネットワークは、パートナー間で葛藤が生じた場合、適切な対処行動を抑制することで、むしろ関係を脅かしかねない。相馬・山内・浦(2003)は、排他性が葛藤解決にネガティブな影響を及ぼす理由として、(1)関係外部にある有益な資源の取得を抑制するため、(2)適切な対処行動そのものを抑制するため、という2点を指摘している。実際、彼らの研究では、恋人や配偶者との間で排他的なネットワークを形成している人は、それ以外の他者からサポートを得ている人よりも、交際期間の長い場合に、建設的な葛藤対処行動を抑制することが示されている。さらに、元来、恋愛関係にある人は関係外部の他

者からサポートを取得することに抵抗を示しやすくなる(相馬・浦, 2007)。この理由は、恋人や配偶者には排他的に振る舞わなければならないという社会規範や、恋人や配偶者と排他的に資源を交換することで子孫の生存可能性を高められるという進化心理学的な見解に求められる。以上の知見は、恋愛関係内で葛藤が生じた場合、関係外部の第三者にサポートを求めることは適切な葛藤対処行動を導くにも関わらず、そうした関係外部へのサポート希求が抑制されやすいことを示唆している。

これらの知見をフレームワークとし、本研究では、恋人との葛藤状況において、どのような個人が関係外部の他者にサポートを希求できるのかについて検討する。なお、関係外部のサポート源については、最も親しい同性友人に限定する。恋人を除けば、同性友人は最もサポートの利用可能性が高いサポート源となる上に、異性友人をサポート源とすることはさまざまな剰余変数の交絡を招く可能性があるからである(Bolger & Amarel, 2007; 嶋, 1991)。

関係外部へのサポート希求を促進し得る個人差要因として、首尾一貫感覚がある。首尾一貫感覚(sense of coherence)とは、(1)ストレスに原因や予測可能性を見出すことができる(理解可能感)、(2)必要な時に自分自身や他者のもつ資源を利用できる(処理可能感)、(3)人生を意味や価値のあるものとして捉えられる(有意味感)、という3つの観点から自分の人生や自らの住む生活世界を評価するストレス対処能力である(Antonovsky, 1987 山崎・吉井監訳 2001)。首尾一貫感覚は、ポジティブ心理学がよい人生の規定因として探求する、人間の優れた機能(human strength)の一つとして位置づけられる。

Antonovsky(1987 山崎・吉井監訳 2001)によると、首尾一貫感覚は必要ときに信頼できる他者へサポート

を求めてその積極的な活用を促すものであり、その点に従来のストレス対処概念にはない独自性がある。首尾一貫感覚が高ければ、自分自身のもつ資源だけではなく、他者のもつ資源も利用することで、効果的な対処行動を行うことができると考えられるのである。これまでに、首尾一貫感覚が高いほどサポートの利用可能性も高いという報告がなされている(Florian & Dangoor, 1994; Pallant & Lae, 2002)。しかし、恋愛関係や夫婦関係といった排他性の高い関係で葛藤が生じた場合、首尾一貫感覚が関係外部へのサポート希求を促進するかどうかについては、これまで検討されていない。そのため、Antonovsky(1987 山崎・吉井監訳 2001)の理論仮説を検証する必要がある。本研究では、恋人との葛藤状況において、首尾一貫感覚は関係外部へのサポート希求を促進するという仮説を設定する。

また、関係外部へのサポート希求は一般的信頼の程度によっても規定されると考えられる。一般的信頼とは、「具体的な特定の相手ではなく、他者一般に対する信頼」である(山岸, 1998, p.42-43)。一般的信頼は他者一般の行動に対する期待のデフォルト値として考えられる。そして、一般的信頼の高い人は、さまざまな他者から得られる潜在的な資源に敏感なため、特定の他者との関係に固執せず、幅広い社会的ネットワークを構築するという。これは信頼の解き放ち理論と呼ばれている。

相馬・浦(2007)は、この信頼の解き放ち理論に基づき、一般的信頼が恋愛関係における排他的なネットワークに及ぼす影響を検討しており、一般的信頼が関係外部へのサポート取得に対する抵抗感を抑制することを示している。この結果は、一般的信頼の高い人が、さまざまな他者のもつ効果的な資源に敏感であるため、恋人以外にも多様なサポート源を持ち、関係外部の他者にサポートを求めることができると解釈できる。ただし、この知見は日常生活においてサポートを要する状況(最近始めたアルバイトにおいて、人間関係がうまくいかない、あるいは仕事をうまく覚えられない)に基づくものである。そのため、恋人との葛藤状況を設定する本研究においても、一般的信頼が関係外部へのサポート希求を促進するかどうかを検証する必要がある。

これまでの議論より、本研究の仮説1を記す。

仮説1 恋人との葛藤状況に直面したとき、首尾一貫感覚と一般的信頼は、いずれも関係外部へのサポート希求を促進する。

ただし、首尾一貫感覚と一般的信頼が関係外部へのサポート希求を促進するプロセスは同一ではない可能性がある。心理的ストレス理論に基づく(Lazarus & Folkman, 1984 本明・春木・織田監訳 1991)、首尾一貫感覚や一般的信頼といった個人差変数は、状況に対

する認知的評価を媒介して、関係外部へのサポート希求に影響を及ぼすと想定できる。先行研究でも、こうしたモデルを支持する知見が得られている(Major, Richards, Cooper, Cozzarelli, & Zubek., 1998)。また、加藤(2001a)は、内的統制や楽観性、自尊心といった個人差要因が、それぞれ異なった認知的評価(対処効力感、脅威、重要性)を介して、対人ストレスコーピングに影響を及ぼすと報告している。この知見は、関係外部へのサポート希求が促されるプロセスが個人差要因によって異なることを示唆している。

そこで本研究では、以下の仮説2を設定する。

仮説2 首尾一貫感覚と一般的信頼が関係外部へのサポート希求を促進する影響は、恋人との葛藤に対する認知的評価に媒介される。

ところで、仮説検証にあたり、いくつかの変数の影響を考慮する必要がある。まず、恋人・配偶者以外のサポート・ネットワークは、男性よりも、女性のほうが広い傾向にあることが知られている(橋本, 2005)。また、交際期間が葛藤対処行動に影響を及ぼすという報告もある(相馬・山内・浦, 2003)。さらに、関係外部へのサポート希求はそのサポート源をどのくらい信頼しているか、すなわちサポート源に対する個別的信頼による影響が非常に強いと考えられる(相馬・浦, 2007)。以上の議論を踏まえ、本研究では、対象者自身の性別、恋人との交際期間、最も親しい同性友人に対する個別的信頼を統制した上でも、仮説が支持されるかどうかを検討する。

方法

対象者

関西圏の3大学で、心理学関連の講義を受講する学生478名に質問紙を配布した。本研究では、親密な異性との葛藤について具体的な事柄を尋ねるため、分析対象を恋人がいると回答した130名に限定した(欠損値のある人を含む)。男性49名(平均19.06歳, $SD = 0.99$)、女性81名(平均19.69歳, $SD = 1.99$)であった。

対象者とその恋人との交際期間は、男性が平均13.27ヶ月($SD = 12.51$)、女性が平均16.38ヶ月($SD = 14.11$)であった。また、親密性を測定するため、Sternberg(1997)が作成し、金政・大坊(2003)が邦訳した愛情の三角理論尺度より、親密性因子から因子負荷量の高かった5項目を抽出し、恋人との親密性を測定した。評定は5件法であった(1:あてはまらない~5:あてはまる)。その結果、男性が平均4.21($SD = 0.79$)、女性が平均4.40($SD = 0.61$)となり、対象者は恋人と親密な恋愛関係にあると判断された。

手続き

2008年4月下旬から5月下旬にかけて、集団形式によ

Table 1 偏相関分析結果、ならびに各尺度の記述統計量と信頼性係数

	1	2	3	4	5	6	M	SD
1. 対処効力感	—						2.38	0.91
2. 脅威	-.40 ***	—					4.01	1.20
3. 重要性	-.03	.41 ***	—				4.31	1.00
4. 個別的信頼	.10	.03	.23 *	—			4.54	0.69
5. サポート希求	-.09	.04	.09	.35 ***	—		3.75	0.95
6. 一般的信頼	-.04	.09	.26 **	.23 *	.21 *	—	3.19	0.78
7. 首尾一貫感覚	.26 **	-.18 *	-.08	.02	-.13	.18 *	3.67	0.74

注) N = 109. 偏相関分析では、性別と交際期間を統制
*p < .05, **p < .01, ***p < .001

る質問紙調査を実施した。調査票は回答終了後、直ちに回収した。回答に要した時間はおよそ20分であった。質問紙の構成

対象者の年齢や性別、恋人との関係性(相互作用の頻度・多様性・強度、交際期間、親密性、関係性認知)を問う項目の後、その恋人との葛藤状況を呈示した。具体的には、「恋人が対象者以外の異性とキス、抱き合う、手をつなぐといった、一般的に恋人同士でなされる行為をしている場面」を想定するよう教示した。先行研究では、人はこれら3つの行為を恋人同士でのみ行われるべきと評価していることが示されている(増田, 1994)。したがって、本研究で設定した場面は、恋人との間に強い葛藤を引き起こす可能性が高く、関係外部へのサポート希求を必要とするものであり、本研究の目的と合致していると考えられる。また、対象者がこうした葛藤状況をより具体的に喚起しやすくなるよう、相馬ら(2003)を参考とし、上記の場面を呈示する前に、これまでに実際に経験した恋愛関係の崩壊を予期させるような問題、ならびにその問題に対して関係外部の他者がどのように関わっていたかについて自由記述を求めた。

認知的評価 加藤(2001a)が作成した尺度を使用した。この尺度は、対処効力感(4項目)、脅威(3項目)、重要性(2項目)の3因子で構成されている。本研究では、5件法(1; あてはまらない~5; あてはまる)で評定を求めた。

個別的信頼 最も親しい同性友人に対する個別的信頼を測定するため、中村・浦(2000)が作成した尺度を使用した。この尺度は1項目からなるものの、一定の信頼性と妥当性が示されている(中村・浦, 2000)。本研究では、5件法(1; 全く信頼していない~5; 強く信頼している)で評定を求めた。

関係外部へのサポート希求 上述した恋人との3つの葛藤状況に直面したとき、概して対象者が最も親しい同性友人に対してどのくらいサポートを求めるかについて、中村・浦(1999)の尺度を用いて測定した。この尺度は7項目から構成されている(e.g., 「そのと

きの自分の気持ちを理解してもらおう」、「問題解決のため、有効なアドバイスや情報を与えてもらう」。本研究では、5件法(1: 全く求めない~5: 非常に求める)で評定を求めた。

一般的信頼 山岸(1998)が作成した尺度を使用した。この尺度は6項目から構成されており、5件法(1: あてはまらない~5: あてはまる)で評定を求めた。

首尾一貫感覚 Antonovsky(1987 山崎・吉井監訳, 2001)が作成し、山崎(1999)が邦訳した人生の志向性に関する質問票を使用した。首尾一貫感覚は理論的に3つの要素(理解可能感、処理可能感、有意味感)から構成されると考えられている。しかし、これら3要素は理論的に非常に強く関連しており、尺度作成の際にも因子間の弁別が目的とされていないため、1因子構造として用いるべきとの見解が示されている(Antonovsky, 1993)。したがって、本研究では、下位概念に弁別せず1因子構造とみなして使用する。尺度の信頼性と妥当性はすでに確認されている(戸ヶ里, 2008)。本研究では、13項目短縮版を使用し、7件法(1~7)で評定を求めた。代表的な項目としては、「あなたは、気持ちや考えが非常に混乱することがありますか」(理解可能感)、「あなたは、あてにしていた人ががっかりさせられたことがありますか」(処理可能感)、「あなたは、日々の生活で行っていることにほとんど意味がない、と感じることがありますか」(有意味感)、といったものがある。得点が高いほど、首尾一貫感覚が高いことを意味するように配点されている。

結果

尺度の検討

各尺度の平均値と標準偏差を算出した。また、それぞれの尺度の内的整合性についても検討したところ、十分な値が示された。これらの分析結果をTable 1に示す。各変数の関連

仮説検証に先立ち、各変数の関連を検討するため、相関分析を行った。なお、分析結果は、性別と交際期間

を統制した偏相関分析によるものである(Table 1)。

分析の結果、サポート希求と、個別的信頼、ならびに一般的信頼との間でやや弱い正の関連が認められたものの、そのほかの変数とは有意な関連が示されなかった。

首尾一貫感覚と一般的信頼が関係外部へのサポート希求に及ぼす影響

首尾一貫感覚と一般的信頼が関係外部へのサポート希求に及ぼす影響を検討するため、階層的重回帰分析を行った。Step 1 では性別(ダミー変数; 男性 = 0, 女性 = 1)と交際期間を、Step 2 では個別的信頼を、それぞれ統制変数として投入した後、Step 3 で一般的信頼と首尾一貫感覚を投入した。

分析の結果、Step 2 から Step 3 にかけて、若干ではあるが有意な説明率の上昇が認められた。それぞれの変数のパス係数をみると、有意傾向ではあるものの、関係外部へのサポート希求に対して、首尾一貫感覚は正の影響を及ぼし、一般的信頼は負の影響を及ぼしていた。これらの分析結果を Table 2 に示す³⁾。

Table 2 関係外部へのサポート希求を従属変数とした階層的重回帰分析結果

	β		
	Step 1	Step 2	Step 3
Step 1			
性別	.11	.02	.06
交際期間	-.02	-.01	.00
Step 2			
個別的信頼		.36 ***	.33 ***
Step 3			
一般的信頼			.17 †
首尾一貫感覚			-.17 †
	Step 1	Step 2	Step 3
R^2	-.01	.11 *	.14 **
ΔR^2		.12 ***	.03 *

注) $N = 120$. $VIF = 1.03 \sim 1.13$

† $p < .10$, * $p < .05$, ** $p < .01$, *** $p < .001$

認知的評価による媒介モデル

首尾一貫感覚と一般的信頼が、認知的評価(対処効力感、脅威、重要性)を介して、関係外部へのサポート希求に及ぼす影響を検証するため、構造方程式モデリングによる分析を行った。まず、モデルの男女差を検討するため、多母集団同時分析を行った。その結果、モデル選択基準(AIC , BCC)を参照したところ、パス係数、共分散、誤差分散のすべてに等値制約を課すモデルの値が最も低かった(Table 3)。このことから、本研究で仮定したモデルに男女差はないと判断された。

Table 3 男女差に関するモデル間比較

等値制約の種類	AIC	BCC
制約なし	84.000	96.461
パス係数	68.130	77.327
パス係数・共分散	63.347	71.655
パス係数・共分散・誤差分散	55.694	61.925

最終的な解を Figure 1 に示す。モデル適合度は十分な値が示された($\chi^2 = 13.694$, ($df = 21$, $p = .882$), $GFI = .967$, $AGFI = .935$, $CFI = 1.000$, $RMSEA = .000$)。パス係数より、首尾一貫感覚は関係外部へのサポート希求に直接正の影響を及ぼし、一般的信頼は関係外部へのサポート希求に直接負の影響を及ぼしていた。また、首尾一貫感覚から対処効力感への正の影響と脅威への負の影響が認められ、一般的信頼から重要性への正の影響が認められた。しかし、これら認知的評価はサポート希求に影響を及ぼしていなかった。したがって、首尾一貫感覚と一般的信頼が関係外部へのサポート希求に及ぼす影響を、認知的評価が媒介するというモデルは認められなかった。

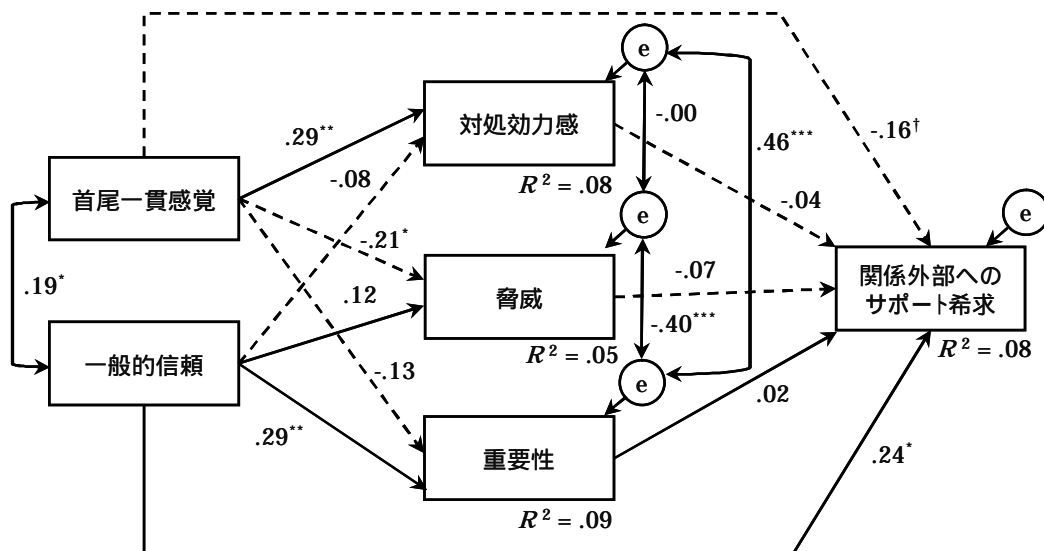
考察

本研究では、恋愛関係における葛藤状況に際して、首尾一貫感覚と一般的信頼が関係外部の他者(最も親しい同性友人)へのサポート希求に及ぼす影響について、葛藤状況に対する認知的評価との関連を含めて検討した。その結果、関係外部へのサポート希求は、首尾一貫感覚によって抑制されるものの、一般的信頼によって促進されることが示された。これらの傾向は、対象者の性別や恋人との交際期間、最も親しい同性友人に対する個別的信頼を統制した上でも認められた。しかし、この影響過程は認知的評価に媒介されたものではないことが示唆された。したがって、仮説 1 は部分的に支持され、仮説 2 は支持されなかった。

首尾一貫感覚が関係外部へのサポート希求に及ぼす影響

恋人との葛藤状況において、首尾一貫感覚は関係外部へのサポート希求を直接抑制することが示された。この効果は、それほど強いものではなかったが、最も親しい同性友人への個別的信頼とは独立したものであった。これは、首尾一貫感覚が高いほど必要ときに他者からのサポート取得を促すという理論仮説と一致しない結果である(Antonovsky, 1987 山崎・吉井監訳 2001)。

この結果について、3 つの可能性を挙げるができる。第1に、首尾一貫感覚の高い人は、恋人との葛藤状況を対処できるものであり、脅威を感じたりせず、重要なイベントではないと評価するため、関係外部の他者にサ



$\chi^2 = 13.694, (df = 21, p = .882), GFI = .967, AGFI = .935, CFI = 1.000, RMSEA = .000$
 注) 実線 = 正の影響, 破線 = 負の影響
[†] $p < .10, ^*p < .05, ^{**}p < .01, ^{***}p < .001$

Figure 1 構造方程式モデリングによる分析結果

サポートを求める必要がない可能性である。実際、本研究では、首尾一貫感覚は対処効力感を促進し、脅威を抑制することが示されている。しかし、これら認知的評価を媒介するモデルが支持されなかったことから、こうした解釈の妥当性はきわめて低いと考えられる。

第2に、首尾一貫感覚の高い人は、対処行動の柔軟性が低く、常に問題焦点型の対処行動を取らざるを得なく、結果として関係外部へのサポート希求が抑制される可能性である。Antonovsky(1987 山崎・吉井監訳 2001)によれば、首尾一貫感覚の高い人は対処行動の柔軟性を備えている。対処行動の柔軟性とは、状況に応じて適切な対処行動を選択できる能力を指し、効果的に精神的健康を高めるとされている(加藤, 2001b)。しかし、これまでの研究では、首尾一貫感覚の高さと、対処行動の柔軟性との関連は確認されていない。ただし、失業者を対象とした縦断研究では、首尾一貫感覚は2ヶ月後の問題焦点型の対処行動を促進する一方で、2ヶ月後のサポート希求とは関連しないことが報告されている(Amirkhan & Greaves, 2003)。この知見は、首尾一貫感覚の高い人が、問題焦点型の対処行動のみを行い、対処行動の柔軟性が低いことを示唆している。今後は、対処行動の柔軟性という観点から、首尾一貫感覚とサポート希求との関連を検討する必要がある。

第3に、恋人や配偶者との葛藤状況において、首尾一貫感覚の高い人は、自身の精神的健康の向上やストレス反応の低減のみを優先し、パートナーとの関係改善やその修復を考慮しないのかもしれない。これまでに、首尾

一貫感覚が精神的健康やストレス反応の低減を促進することは、多くの先行研究で示されてきた(Amirkhan & Greaves, 2003; Togari, Yamazaki, Takayama, Yamaki, & Nakayama, 2008)。しかし、こうしたストレス対処能力の高さが、かえってパートナーとの葛藤解決を阻害するかもしれないというのである。Murray, Holmes, & Collins (2006)によると、人は基本的に他者との良好な関係の構築・維持に動機づけられるものであるものの、パートナーからの拒絶の脅威を知覚するとその苦痛やストレスから自己を守るために関係からの離脱を図ろうとする。人が利用できる時間やエネルギー、資源は限られているため、時として他者との良好な関係と自己の適応を両立させることが困難となるのである(Kumashiro, Rusbult, & Finkel, 2008)。これらを踏まえると、恋人や配偶者との葛藤状況において、首尾一貫感覚にはパートナーとの葛藤解決よりも自らの精神的健康の向上を優先する機能が備わっており、葛藤解決には動機づけられないため、関係外部の他者からのサポートによる資源取得を行おうとしないと考えられる。ただし、首尾一貫感覚が関係外部へのサポート希求を抑制する影響力が比較的弱いものであったことから、首尾一貫感覚の高い人が必ずしも自己の精神的健康を向上するとは断定できない。今後、こうした解釈が妥当なものであるかを検証していく必要がある。

一般的信頼が関係外部へのサポート希求に及ぼす影響

恋人との葛藤状況において、一般的信頼は関係外部

へのサポート希求を直接促進することが示された。また、その効果は最も親しい同性友人への個別的信頼とは独立であることが示唆された。これは相馬・浦(2007)と整合する知見である。信頼の解き放ち理論から示唆されるように(山岸, 1998)、一般的信頼の高い人は、多様なネットワークから得られる潜在的な資源に敏感であるため、恋愛関係を形成しても排他的な関係を築きにくく、恋人との間で葛藤が生じると、関係外部の他者へサポートを求めることができるのであろう。本研究の知見は、一般的信頼がもつサポート・ネットワークの拡張機能における一般可能性をより高めるものといえよう。

認知的評価が関係外部へのサポート希求に及ぼす影響

本研究では、恋人との葛藤状況に対する認知的評価が関係外部へのサポート希求に及ぼす影響は認められなかった。すなわち、対処効力感や脅威、重要性は、いずれも首尾一貫感覚と一般的信頼が関係外部へのサポート希求に及ぼす影響を媒介しないことが示された。この結果についても、考察を加える必要がある。これまでの研究において、脅威や挑戦といった認知的評価を行うほど他者にサポートを求めやすいと報告されている(Major et al., 1998; Mikulincer & Florian, 1995)。しかし、これらの研究では、流産や軍隊での訓練など、実際にストレスフルな状況に曝されている人を対象としている。それゆえ、より現実的に状況を捉えることができたため、サポート希求との関連が認められたと考えられる。一方、本研究では場面想定法が用いられたため、設定された場面に現実味を感じられなかった対象者も含まれていた可能性がある。そのため、呈示された場面に対する認知的評価そのものは行われたとしても、関係外部の他者にサポートを求めるという行動にまでは結びつかず、両者の間に強い関連性が認められなかったのであろう。

本研究の限界

最後に、本研究の限界について触れておく。第1に、本結果は場面想定法に基づくものである。これは、本研究が恋人の浮気という非常にプライベートかつストレスフルな状況を扱っていることに依拠する。確かに、場面想定に先立ち、実際に経験した恋人との関係崩壊を予期させるイベントと、それに対する関係外部の他者の関わり方について自由記述を求めることで、対象者が呈示された葛藤状況を具体的に喚起しやすくなるよう配慮した。しかし、場面想定法によって得られた知見は、現実場面での行動を反映しにくいという限界を孕んでいる(Ickes, 2000 和田訳 2004)。今後は、より現実的な状況を喚起できる方法論を用いる必要がある。

第2に、本研究で設定した3つの葛藤状況は(キス、抱き合う、手をつなぐ)、いずれも非常に強い葛藤を引き

起こし得るものであった。実際、脅威や重要性といった認知的評価の得点が非常に高かったことから、対象者はこれらの場面に強い葛藤状況として捉えていたと考えられる。そのため、関係外部へのサポート希求に対する脅威や重要性の効果が検出できなかった可能性も否定できない。今後は、設定する場面についてより吟味することが必要であろう。

第3に、本研究では、Antonovsky(1993)の見解に基づき、首尾一貫感覚を1因子構造として捉えて検討した。事実、多くの先行研究では、3因子構造(理解可能感、処理可能感、有意味感)を仮定せず、1因子構造とみなした検討が行われている。しかし、Antonovsky(1987 山崎・吉井監訳 2001)の理論的背景を重視するならば、3因子に分類した検討を進めていく必要がある。近年、2因子分析により、3因子の背後に首尾一貫感覚を仮定したモデルも提案されている(Feldt, Lintula, Suominen, Koskenvuo, Vahtera, & Kivmäki, 2007)。今後は、首尾一貫感覚の理論的定義と操作的定義の不一致を解決していくべきであろう。

引用文献

- Amirkhan, J. H., & Greaves, H. (2003). Sense of coherence and stress: The mechanics of a healthy disposition. *Psychology and Health, 18*, 31-62.
- Antonovsky, A. (1987). *Unraveling the mystery of health: How people manage stress and stay well*. San Francisco: Jossey-Bass.
- (アントノフスキー, A. 山崎喜比古・吉井清子 (監訳) (2001). 健康の謎を解く ストレス対処と健康保持のメカニズム 有信堂)
- Antonovsky, A. (1993). The structure and properties of the sense of coherence scale. *Social Science and Medicine, 36*, 725-733.
- Baumeister, R. F., & Leary, M. R. (1995). The need to belong: Desire for interpersonal attachments as a fundamental human motivation. *Psychological Bulletin, 117*, 497-529.
- Bolger, N., & Amarel, D. (2007). Effects of social support visibility on adjustment to stress: Experimental evidence. *Journal of Personality and Social Psychology, 92*, 458-475.
- Feeney, B. C. (2004). A secure base: Responsive support of goal strivings and exploration in adult intimate relationships. *Journal of Personality and Social Psychology, 87*, 631-648.
- Feeney, B. C., & Thrush, R. L. (2010). Relationship influences on exploration in adulthood: The characteristics and function of a secure base. *Journal of Personality and Social Psychology, 98*, 57-76.
- Feldt, T., Lintula, H., Suominen, S., Koskenvuo, M., Vahtera, J., & Kivmäki, M. (2007). Structure validity and temporal stability of the 13-item sense of coherence scale: Prospective evidence from the population-based HeSSup study. *Quality of Life Research, 16*, 483-493.

- Florian, V., & Dangoor, N. (1994). Personal and familial adaptation of women with severe physical disabilities: A further validation of the double ABCX model. *Journal of Marriage and the Family*, **56**, 735-746.
- 橋本 剛 (2005). 対人関係に支えられる 和田 実 (編) 男と女の対人心理学 北大路書房
- Ickes, W. (2000). Methods of studying close relationships In W. Ickes & S. Duck (Eds.), *The social psychology of personal relationships*. Chichester: John Wiley & Sons. pp. 157-180.
- (イクス, W. 和田 実(訳) 親密な関係を研究する方法
イクス, W.・ダック, S. 大坊郁夫・和田 実 (監訳)
(2004). パーソナルな関係の社会心理学 北大路書房 pp. 193-220.)
- 金政祐司・大坊郁夫 (2003). 愛情の三角理論における3つの要素と親密な異性関係 感情心理学研究, **10**, 11-24.
- 加藤 司 (2001a). 対人ストレス過程の検証 教育心理学研究, **49**, 295-304.
- 加藤 司 (2001b). コーピングの柔軟性と抑うつ傾向との関係 心理学研究, **72**, 57-63.
- Kumashiro, M., Rusbult, C. E., & Finkel, E. J. (2008). Navigating personal and relational concerns: The quest for equilibrium. *Journal of Personality and Social Psychology*, **95**, 94-110.
- Lazarus, R. S., & Folkman, S. (1984). *Stress, appraisal, and coping*. New York: Springer.
- (ラザルス, R. S. & フォルクマン, S. 本明 寛・春木豊・織田正美 (監訳) (1991). ストレスの心理学 認知的評価と対処の研究 実務教育出版)
- Major, B., Richards, C., Cooper, M. L., Cozzarelli, C., & Zubek, J. (1998). Personal resilience, cognitive appraisals, and coping: An integrative model of adjustment to abortion. *Journal of Personality and Social Psychology*, **74**, 735-752.
- 増田匡裕 (1994). 恋愛関係における排他性の研究 実験社会心理学研究, **34**, 164-182.
- Mikulincer, M., & Florian, V. (1995). Appraisal of and coping with a real-life stressful situation: The contribution of attachment styles. *Personality and Social Psychology Bulletin*, **21**, 406-414.
- Murray, S. L., Holmes, J. G., & Collins, N. C. (2006). Optimizing assurance: The risk regulation system in relationships. *Psychological Bulletin*, **132**, 641-666.
- 中村佳子・浦 光博 (1999). 適応および自尊心に及ぼすサポートの期待と受容の交互作用効果 実験社会心理学研究, **39**, 121-134.
- 中村佳子・浦 光博 (2000). ソーシャル・サポートと信頼との相互関連について 対人関係の継続性の視点から社会心理学研究, **15**, 151-163.
- Pallant, J. F., & Lae, L. (2002). Sense of coherence, well-being, coping and personality factors: Further evaluation of the sense of coherence scale. *Personality and Individual Differences*, **33**, 39-48.
- 嶋 信宏 (1991). 大学生のソーシャルサポートネットワークの測定に関する一研究 教育心理学研究, **39**, 440-447.
- 相馬敏彦・浦 光博 (2007). 恋愛関係は関係外部からのソーシャル・サポート取得を抑制するか サポート取得の排他性に及ぼす関係性の違いと一般的信頼の影響 実験社会心理学研究, **46**, 13-25.
- 相馬敏彦・山内隆久・浦 光博 (2003). 恋愛・結婚関係における排他性とそのパートナーとの葛藤時の対処行動選択に与える影響 実験社会心理学研究, **43**, 75-84.
- Sternberg, R. J. (1997). Construct validation of a triangular theory of love scale. *European Journal of Social Psychology*, **27**, 313-335.
- 戸ヶ里泰典 (2008). 成人の SOC は変えられるか 山崎喜比古・戸ヶ里泰典・坂野純子 (編) ストレス対処能力 SOC 有信堂 pp. 55-67.
- Togari, T., Yamazaki, Y., Takayama, T. S., Yamaki, C. K., & Nakayama, K. (2008). Follow-up study on the effects of sense of coherence on well-being after two years in Japanese university undergraduate students. *Personality and Individual Difference*, **44**, 1335-1347.
- 山岸俊男 (1998). 信頼の構造 こころと社会の進化ゲーム 東京大学出版会
- 山崎喜比古 (1999). 健康への新しい見方を理論化した健康生成論と健康保持能力概念 SOC *Quality Nursing*, **5**, 825-832.

註

- 1) 本論文は、2008 年度大阪大学大学院人間科学研究科に提出した修士論文の一部に、加筆・修正を行ったものである。ご指導いただきました大坊郁夫先生(大阪大学大学院人間科学研究科)、調査実施にご協力いただきました谷口淳一先生(帝塚山大学心理福祉学部)、毛新華先生(大阪大学大学院人間科学研究科)に、深く御礼を申し上げます。
- 2) 本研究の一部は、日本健康心理学会第 22 回大会、日本社会心理学会第 50 回・日本グループ・ダイナミクス学会第 56 回合同大会において報告された。
- 3) 恋人との親密性、ならびに各場面(キス、抱き合う、手をつなぐ)の効果を統制するため、これらの要因(場面はダミー変数)を説明変数とする同一の分析を行った。しかし、いずれの要因にも有意な影響は認められず、同様の結果が再現された。

Effects of sense of coherence and general trust on support seeking outside romantic relationships in case of interpersonal conflict between romantic partners

Ryosuke ASANO(*Graduate School of Education and Human Development, Nagoya University*)

Toshikazu YOSHIDA(*Graduate School of Education and Human Development, Nagoya University*)

It is noted that exclusivity in romantic relationships inhibits the seeking of effective resources from outside their relationship; as a result, the partners in the relationship are unable to cope appropriately with interpersonal conflicts between themselves. This study investigated how sense of coherence (SOC) and general trust affect support seeking outside romantic relationships (the closest same-sex friend) in case of interpersonal conflict between romantic partners through the mediation of cognitive appraisals. Participants were 130 undergraduates (49 males, 81 females) who have romantic partners. Hierarchical regressions suggested that SOC decreased support seeking outside romantic relationships and general trust facilitated support seeking (with controlling for sex, dating periods, and particularistic trust). However, structural equation modeling suggested that SOC and general trust had no influence on support seeking outside romantic relationships through the mediation of the cognitive appraisals. Implications for an association between support seeking outside romantic relationships and the predictors are discussed.

Keywords: romantic relationships, exclusivity, support seeking, sense of coherence, general trust.